



私たちの家族

日本新使徒教会ニュースレター

2014年(平成26年)第10号・新使徒教会日本教区発行

The Newsletter of the New Apostolic Church Japan Number 10, 2014

〒206-0014 東京都多摩市乞田 1320(本部) Tel. 042-374-0070

〒799-2468 愛媛県松山市小川甲 110 番地 17 Tel. & Fax. 089-994-3556

編集者: ヴォルフガング・R・アーデ Tel 090-6923-0115

矢幡 賢治 E-mail: nac_matsuyama@ybb.ne.jp

(新使徒教会英語版ホームページ Current Word of Month より)

小さな貢献



いつものことながら、作物の収穫は素晴らしいです。種が成長して、成った果実をそのまま賞味したり、貴重な飲料にしたり、おいしいパンや豪華な食事を作ったりします。作物の中には、収穫までに細心の注意や忍耐を必要とするものもあれば、相当の手間をかけなければならないものもあります。一方で、木や茂みから摘み取るだけの、それほど手がかからないものもあります。しかし、人の手がかかるかどうかに関係なく、これらすべては、目に見える被造物として神からの祝

福を受けたものです。この祝福は、収穫されるまでその力を一切失うことがないのです。

では、目に見えない被造物についてはどうでしょうか。これも種蒔き、成熟、収穫という法則の下もとにあります。

神は地上に御自分の教会を建立されました。贖いの業を構築され、その業が御旨に従って発展するためのすべての条件を整えられました。

神は御子を、人としてお遣わしになり、御子を犠牲

としてささげることで贖いの土台を造られました。教会には使徒職をお与えになり、それと同時に人類が救いを獲得できるように聖礼典^{サクラメント}を制定されました。すべては神から出たものであり、こんにちにおいてもすべては神からもたらされています。

私たちは、すべてを単なる傍観者として眺めていて「神はなんと素晴らしいことをなさったことか！我々はすべてが収穫の時を迎えるまで待っていればよろしい」と思っているかもしれません。

もちろん、収穫のために祈りますし、礼拝にも行きますが、それだけで十分なのでしょうか。礼拝後に「素晴らしい説教だった。きょうのクワイアは本当に素晴らしかった…」と言っているだけでよいのでしょうか。私はよいと思いません。

収穫の時期までに熟していること——前段で指摘した問題に常に向き合っていること——が私たちにとって大切なのです。何もせずに成熟するわけではありません。私たちにもしなければならぬことがあります。自ら取り組んで、キリストによる新しい被造物が私たちの中で成長し、キリストの本質が私たちの中で形成され、神からいただいたあらゆる良き賜物が私たちの中で発達できるようにしなければなりません。それが私たちの貢献であります。神の業に比べればほんの小さな貢献ですが、見くびることはできません。

古いアダムが神の御国に入ることはできません。不可能です。ですから自分自身の取り組みが必要なのです。

私たちはたいてい「私は悪魔とそれにつける一切の業や流儀を放棄し」という主に立てた誓いを遂行するための取り組みをしています。これは、神による懲罰を恐れるからではなく、罪の入る余地が御国に存在しないからであり、罪によって私たちがふさわしくなれないからであり、悪魔の業や流儀という雑草が増え過ぎると成熟すべき良い果実が育たなくなる恐れがあるからです。

成熟しふさわしくなることは各人の責任ですが、集団として収穫に貢献することも、私たちには求められています。兄弟を慰め、姉妹を補佐し、兄弟姉妹を助け、兄弟姉妹のために祈り、ふさわしくなろうとする兄弟姉妹の努力を補佐し、試みや苦難にあっても信仰に忠実であろうとする兄弟姉妹の努力を補佐し、がっかりさせられるような時があっても勇気や希望を失わせないようにすることが、集団として、会衆としての私たちの任務であります。収穫期になれば総動員です。皆の手伝いが必要です。そうするならば、天の父が私たちの小さな貢献を祝福して下さる時に、多くの収穫を得ることができるのです。

主使徒の礼拝より

(アーデ牧者より)

信仰による確信

今年の収穫感謝祭も、天の父に私たちの感謝をお示しする絶好の機会となりました。私たちは、前回九月最後の礼拝で、勧めを受けながら、神の御臨在を静かに体験したでしょうか。感謝の意味をよく考えたでしょうか。そして天の父に喜んでいただきたいという思いで感謝を表したでしょうか。自分自身を振り返ってみましょう。

十月の礼拝では、信仰のもたらす効果に焦点を当てます。ヤコブの手紙 2 章 26 節には次のように書かれています「魂のない肉体が死んだものであるように、行いを伴わない信仰は死んだものです。」何の効果もない信仰生活というのは、実際にあり得ません。

まず、信仰によってもたらされる効果として、私た

ちが神の業の一部であると自覚できることが挙げられます。神は、人類への救いが根付いて、それが世界中に広がり、最終的に私たち自身の属すそれぞれの国々や私たち一人ひとりにも行き届くように、御子をお遣わしになりました。これにより、私たちはもう一つの神の業を体験できるようになりました。それは水と御霊による再生であります。私たちは、神の御言葉と聖餐によって強められることによって、神との交わりを望む気持ちが増え強くなります。

信仰によってもたらされるもう一つの効果は、神が私たちのためにして下さったあらゆる良き働きに対して、皆で神を称えることでもあります。これは、キリストの教会が持つ一つの特徴であり、一致と調和をもつ

て神を称えるべきです。

十一月の第一日曜日は、故人のための特別礼拝です。今年も私たちは神による特別な奉仕を体験します。ここでシュナイダー主使徒の言葉を引用します：

陰府の領域に関する教義は、新使徒教会の信仰が持つ豊かさを象徴する一つであります。最近私はある記事を読んで驚きました。というのは、イエス・キリストを信じるが、死後の生命は信じないというキリスト教徒が増えているのです。また、聖礼典は肉体としての体があるから受けられるのだ、と多くの人々が考えています。つまり、一度肉体から離れた霊と魂は死者の復活を待つしかない、というわけです。最後の審判において、復活した死者は、神に受け入れていただいた場合、御国に入ることを許されます。

私たちにとって、人は肉体が死んでも生き続けます。魂や霊が死なないだけでなく、性格も引き継がれます。霊的となった人は、陰府の世界の中で、物事を決めることができますし、とりわけ神を受け入れることも拒むことも自分で決められるのです。聖礼典 sacramentを受けるとかどうかも、肉体が無くても、自由に選択できるのです。

陰府にいる者たちはこうした選択つかの自由が与えられている中で、提供されている恵みを掴み取るか、あるいは拒否するか、どちらかを選択できます。恵みの行為に与るのに必要な信仰が魂にあるかどうかは、神だけが御存知です。信仰のある魂は、故人のための特別礼拝が行われる時に、洗礼と御霊の証印に与ります。私たちがすべきことは、故人を執り成すことでもあります。祈りを通して故人を救うことはできません。彼らを救えるのはイエス様だけです。しかし愛を彼らに証しすることは私たちにもできます。私たちの祈りは彼ら

を招待することに匹敵します。この招待を、陰府にいる者たちは受けるか拒否するか自由に選択できます。

陰府に関する問題については、慎重かつ真摯な姿勢を示しましょう。陰府の領域について夢のようなものを見た、と言ってくる信者の方がおります。このような経験はひとえに個人的な関心によるものだと、私は考えます。そうした経験を、雲をつかむような真理まで押し上げるようなことは、決してすべきではありません。このことについて一例を挙げたいと思います：別々の地域に住む二人の女性が、同じ有名人を「見かけた」と言ってきました。一人目の女性に対してその有名人は「病気が治ってうれしいです」と言ったそうです。ところが二人目の女性には、その有名人が数週間後「今すぐ助けてほしい」と言ったそうです。どちらを信じたらよいのでしょうか。

親しい人が病気になったらその状況について安心させてあげたいと思うのは、よく理解できます。しかし「しるし」が安心させるための最善の材料ではない、と思うのです。本当の安心は、神の愛を信じることでそこから得られる確信によってもたらされるのです。ひどい辛さによる悲しみを共有し、一緒に祈り、神への信仰と確信を強めることが私たちの任務なのです。

このように、私たちは神の子として再生したことにより、祈ることができ、「信仰による確信」を事実として体験することができます（ヘブライ 11：1）。勇気を持ちましょう。他者を憐れみましょう。戦いましょう。隣人の友人であるだけでなく、陰府の領域の魂にとっても友人となりましょう。



主使徒、フランスを訪問

6月1日、ジャン＝ルーク・シュナイダー主使徒はフランス・トゥールーズで行われた礼拝でレイモン・エストラーデ使徒の引退式を行いました。エストラーデ使徒は44年にわたって教役者を歴任し、そのうち17年間使徒職に就きました。そしてジャンノー・ライプフリート教区長老が後任の使徒職に任命されました。



引退したレイモン・エストラーデ使徒はフランスの大部分を担当していました。さらにコンゴ民主共和国とニューカレドニアも長年にわたり担当していました。シュナイダー主使徒は、自身の友人であり同僚であったエストラーデ使徒のあらゆる業績に加えて、彼の忠誠心や愛のこもった尽力に感謝を表明し、引退に際してエストラーデ夫妻への豊かな喜びと祝福を祈念しました。

新しく使徒に任命されたジャンノー・ライプフリート使徒はフランス北東部ロレーヌ地方エイ＝シュル＝モゼールの出身で47歳。フランス語の他にドイツ語と英語が堪能です。

礼拝前日、トゥールーズ教会が主催して、エストラーデ使徒の引退を記念して音楽会を開きました。最後に感謝のしるしとして、エストラーデ使徒への記念品贈呈が行われました。



<礼拝記録>

日付：2014年6月1日(日)

場所：フランス・トゥールーズ

担当教区使徒：ベルント・コーベルシュタイン

開会讃美歌：「わが心はますます天国に向かって」(英語版408番)

出席使徒：ベルント・コーベルシュタイン(ドイツ/フランス)、チチ・チセケディ(コンゴ民主共和国)各教区使徒；ヘルベルト・バンスバッハ、イェンス・リンドマン、ゲルト・オプテンブラーツ(以上ドイツ)、クレメント・ヘック(ルクセンブルク)、レイモン・エストラーデ(フランス)各使徒
説教補佐：チセケディ教区使徒、エストラーデ使徒、バンスバッハ使徒

人事：引退(エストラーデ使徒)、任命(ライプフリート使徒)

生中継先：フランス及びベルギー

出席総数：約4,100



いただいている約束を伝えなさい！



使徒言行録 2 章 39 節

「この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」

キリストにある、敬愛する兄弟姉妹の皆さん、今、聖歌隊が「主よ、祝福して下さい！」と歌ってくれましたが、この祈りの言葉は私たち共通の思いではないかと思えます。もちろん私たちは、すでに主から祝福していただいていることを知っています。このようにして私たちを祝福して下さった神への感謝を以て、この礼拝を始めたいと思えます。本日はフランス新使徒教会にとって極めて特別な日であります。敬愛するエストラデー教区使徒が引退を迎えることにより、新しい時代の幕開けとなるのです。つまりエストラデー氏は、私たちが神様から祝福をいただくための器^{うつわ}として一世代を築いた使徒たちの、最後の一人なのです。私は故ルネ・イジュラン教区使徒を思い出します。そして教区使徒補佐であったアンリ・イジュラン使徒、デュボワ使徒、そしてエストラデー使徒。この四名の方々は私たちに非常に多くのものを与えて下さいました。非常に多くのことを教えて下さいました。私たちを強めて下さいました。慰めて下さいました。目標に向かって導いて下さいました。改めて神に感謝を申し上げます。そして陰府におられるか、あるいはけさこの場におられるかに関係なく、四名の皆さんに感謝を申し上げます。私たちは、最高の感謝を表明し、心の中にいただいたものを大切に受け継いでいくことを誓います。

本日の礼拝は、私たちにとって大きな祝祭であるペンテコステの一週間前であり、そういう意味でも特別な日であります。私たちは自らをペンテコステに備えているところです。私は、このペンテコステについて考えている時に、一度目のペンテコステに起きた出来事についての記事を読んでみようと思いました。特に聖霊が注がれた後の出来事であります。使徒ペトロはいただいたばかりの聖霊の力を用いて、そして使徒職の持つ力を存分に発揮して説教を行ったのです。ペトロはイエス・キリストによる救いについて語り、集まった多くの人々に、自分たちが何をすべきかを説きました。つまり、洗礼を受け聖霊に与ることです(使徒言行録 2:38)。ペトロは、キリストに救いがあるという思いでイエスを尋ね求めるならば救われる、ということを聴衆に教えたのです。それと同時に、預言者



ヨエルの言葉を聴衆に思い起こさせて、その預言がここで成就したことを教えたのです「わたしの僕やはしたためにも、／そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する」(使徒言行録2:18)。愛する兄弟姉妹の皆さん、当時ペトロを通して永遠なる神から与えられた——しかも聖霊を通して現代の私たちにも与えられている——この御言葉、この約束に、私は感動を覚えます。ここでペトロは次のように述べています「この約束は」——救いの約束は——「あなたがたにも与えられているものなのである。」このペトロの言葉を特に強調し、けさ皆さんお一人お一人の心にこの言葉を深く刻みつけたいと思います。つまり、救いの約束があなたがたに与えられているのです。「私はあなたがたにイエス・キリストによる救いを提供します。」主はこのことを皆さんに託されたのです。

今回ここにいる皆さんの中には、数年ぶりに礼拝に出席したという人もおられるかもしれません。そこで、一つはっきりさせておきたいと思います。それは、いただいているこの約束が反故ほごにされることは、絶対に無いということです！こんにちでもこの約束は有効であり、皆さん一人ひとりにこの約束が与えられているのです。この救いの約束は、私たちすべてに与えられており、神は何一つ変えておられません。「私はあなたに救いを約束しました。それをあなたに提供します。あなたがその提供したものを受け入れるならば、あなたは救いを受けることができますでしょう。」

ペトロが引用している聖書の言葉は、御霊が注がれた者たちにどうすることが起こるのかを示しています「わたしの僕やはしたためにも、／そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。」これは、こんにち遣わされている聖霊が伝えるメッセージの一つで

もあります。この聖霊という賜物に与った者たちは預言することが召めされている、ということでありませぬ。現代においては少し奇妙に思えるかもしれませんが。しかし、まず旧約聖書に書かれている預言にどのような意味があったのかを振り返って検証してみましょ。う。

旧約時代、預言者に与えられていた召命しょうめいは、神の御旨を宣べ伝えることでした。愛する兄弟姉妹の皆さん、私たちは神の御旨をこんにちにおいて宣べ伝えることを、召命として与えられております。テレビやラジオに出て御旨を宣べ伝えなさい、ということではありません。ツールーズのキャピトル<市庁舎>広場にいる群衆に向かって語りなさい、ということでもありません。私たちに与えられている任務とは、神の御旨を、自らの言動を通して宣べ伝えることなのです。あるいは言動を慎んで「神が私たちに望んでおられる言動はこれだ」というものをはっきり示すことなのです。愛する兄弟姉妹の皆さん、私は皆、聖霊という賜物をいただいております。主イエス・キリストの栄光を相続するのに必要なものをいただいております。それと引き替えに、神が私たちに期待しておられるのは、今の時代の人たちに神が何を望みなのかを示すことでもあります。

旧約の預言者たちもまた、過去と現在を明示して、そしてその両方について解明することを任務としていました。聖霊の賜物をいただいている私たち神の子も、同様の任務を担っております。これは、フランスの歴史を解説しなさい、あるいはベルギーの兄弟姉妹にはベルギーの歴史の解説をしなさい、などということではありません。要は、神がこれまでなさったことや今もなさろうとしていることを公の場で明らかにしなさい、ということなのです。これを実行するためには、神に感謝し、神を称えます。そういう意味で、私たちも預言者として召されています。感謝と賛美を通して、神のこれまでの働きと今なお継続している働きを公に示すために、私たちが召されているのです。水と聖霊によるバプテスマに与った者たちは感謝をします。神がこれまでなさったことや今なおなさっていることを、いつも経験しているからです。

預言者も、未来を予告する任務を担っていました。私たちにもその任務があります。私たちは未来のことを知っています。すなわち、主が再びこの世において

になる、ということです。この未来のことを宣べ伝えるのです。けさはさらに深く掘り下げていきたいと思えます。水と聖霊によるバプテスマに与った私たち神の子は、自らを主の再臨に備えることによって、この未来を形成していくことを補佐するために召されており、ここで本日の聖句に戻りたいと思えます「この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、…主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」この救いの約束は私たちだけではなく私たちの子孫にも与えられているのです。つまり、私たちは任務、実際には責任を負っているということです。言うなれば、私たちが預言者とならなければいけないということです。そして、過去における神の働き、こんにちにおける神の働き、未来における神の働きのすべて一つ一つに感謝することによって過去と現在に光を放ち、主の来臨に備えることによって未来に備えなければなりません。それだけではなく、未来に備える時には私たちの子孫の未来にも心を留めます。なぜならこの救いの約束は彼ら子孫にも与えられているからです。

愛する兄弟姉妹の皆さん、「この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも与えられている」という約束についてじっくり考えてみましょう。

私たちにとってこの約束が意味するところは、まず一つ目に、教会が私たちの代で無くなってしまわない、ということです。神の約束が持つ有効性は私たちの寿命を遙かに凌ぐものであります。「この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、…主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」神は御自分の役割を果たして下さいます。私たちには、救いの約束を手抜き無く人々に伝えていく任務が神から与えられています。救いの約束は私たちの子どもたちにも適用されます。

このことはまず何よりも親の責任です。親の立場にいる新使徒教会員すべてに申し上げたいことがあります。皆さん、御自身の霊的資質を子どもたちに受け継いでいくことは皆さんの責任です。

こんにちでは、多くのことを他人や学校、日曜学校

の先生などに任せきりにすることが当たり前になっています。改めて確認しますが、子どもは親の責任です。親は時間をかけて、救いの約束を子に伝えなければいけません。どんなに忙しくても、伝えなくてはなりません。親が責任をもって、必要な時間を設けて下さい。親御さんに向かって説教じみたことを申し上げるつもりはありませんが、時には何が大切なのかを思い起こすことが必要です。結局私たちは、子どもたちのこの世的な幸福のために時間を使っています。例えばサッカー教室や音楽やダンスのレッスンに通わせる。テニスをさせなければいけない。子供たちはあれやこれやとしなければならない。別にそれがいけないわけではありません！しかし霊的な幸福や永遠の命についてはどうなのでしょう。先ほどのこの世の幸福よりも大切ではないのでしょうか。もう少し時間をかけて、子供たちの永遠の生命に気を配るべきではないのでしょうか。

救いの約束を子供たちに受け継いでいくためには、まず日曜日を聖として維持します。礼拝を他の活動と同じように考えることはできません。区別しなければなりません。礼拝は、一週間の中で極めて特別な時間なのです。そしてこの特別な時間を、私たちは必要としているのです。礼拝は安息の時間、心を落ち着かせてじっくりと考える時間、私たちの気持ちを良くする時間あります。私は親御さんに申し上げたい、この安息の日を聖のままにして下さい。礼拝を、一週間の行事の一部などと考えないで下さい！礼拝に対する子供たちの考え方に大きく影響してしまいます。聖とすることによって日曜日を際立たせましょう！

お子さんがいらっしやらない——あるいはお子さんがもう成人されている——皆さんは「確かにその通りだが、自分には関係ない話だ」と感じておられるかもしれませぬ。しかしそんなことはありません。私たちの信仰と救いの約束を次世代に伝えていくことは、私たち一人ひとりが果たすべき役割なのです。

第一線を退かれた兄弟姉妹の皆さんは、現役の社会人にとっての模範であり手本としての役割を担っています。大人において先輩は後輩にとっての模範であり手本としての役割とになっています。二十代周辺の成

神はイエス・キリストの救いを与えて下さる



人には、十代の若い兄弟姉妹にとって手本としての役割があります。十代の少年少女は、自分にその自覚がなくても、幼少の子供たちにとっての手本としての役割を担っています。つまりすべての人たちが、この救いの約束を時代に人たちに伝えていく役割を担っているのです。この役割は、聖礼典の時からすでに始まっているのです。

救いの約束を人々に伝えるためにはどうすればよいのでしょうか。もちろん強制はできません。両親さえ、自分の子供に信じさせたり信仰に忠実であることを強制したりすることはできません。主任牧師が会衆の兄弟姉妹に、無理に信じさせたり服従を強要したりすることもできません。私たちができることは、知らせ、納得させ、励ますことだけです。これしかできません。救いの約束を伝えるということは、聖書でいうところの「永遠の救いの源」である（ヘブライ 5:9）イエス・キリストへの信仰を伝えるところから着手しなければならないということです。そのためには、私たちが人々に知らせなくてはなりません。つまり、私たちはイエスについて語り、福音を聞いてもらい、イエスの声を聞いてもらい、イエスが一部の物事に対して考えを異にされることを、周囲の人々や次世代の人々に伝えなくてはいけない、ということです。ある考えを表明する時、何かを聞いた時、社会におけるある事象を見た時、それがイエスの同意を得られないものである場合に、それに私たちが同意することはキリスト教徒としてできない、ということ、つまりイエスはこの考え方に賛成されない、イエスはこの意見

に賛成されない、イエスはこの手の活動に賛成されない、ということ、人々に知らせることが、私たちに課せられた職務なのです。そうです。「これがイエス様のお考え」「これがイエス様のお望み」「これがイエス様のなさること」「こういう状況でイエス様は助けて下さった」「こういう状況でイエス様は執り成して下さった」ということを示すのです。イエスがどんなお方か、何をなさるのか、どんなお考えなのかを示し、イエスが和解をお望みであることを示すことが、私たちの義務です。イエスが信仰に忠実なお方であること、約束を守って下さるお方であること、常に御自分が言われたことを実行されるお方であることを、人々に示す必要があるのです。

さらに、イエスの教えを人々に納得させることが私たちの職務であります。人々の気持ちをイエスに向かわせるためには、私たちが行動面で手本となります。

ここでもう一度、親御さんが示すべき手本を示したいと思います。非常にわかりやすいです。イエス様はいつでも仲良くしようとして下さる、と子供たちに教えればよいのです。ただしこれを子供たちに納得させるためには、ただ家庭内で話すだけでなく、赦すという行為を実行に移します。人を納得させるためには、人を赦すしかありません。単純かつ確実なことですが、結婚生活においても、家族の中においても、私たちの周囲においても、人とのかわりにおいても、福音に即した生き方をしなければなりません。愛も真理も赦しもすべて空虚な概念でないことを示すことは、私たちの責任です。努力して福音に即した生き方を実践しなければいけません。そうすれば人を納得させることができるでしょう。そして、ただイエスについて語るだけではなく、イエスがお据えになった道こそ正義であることを、実際に人に納得してもらおうのです。

子供たちや次世代の人たちを励ましましょう。そのためには会衆の中でこの愛を感じてもらおうのです。そうすれば会衆を気に入ってもらえることができます。恵みというものが言葉だけのものではないことがわかってもらえるでしょう。たとえある若い兄弟が無分別な行為に走ったり、その人物が変わった存在——もしかしたら全く相容れない存在——であったりしても、愛されているんだ、大切にしてもらっているんだ、という気持ちをその兄弟にも持ってもらおうのです。子供た

ちや次世代の人たちも主イエスについて行くことができるように、人々に知らせ、納得させ、励ましましょう。これが第一歩であります。

ペトロは、しなければならないことについて解説しています。イエスを通してもたらされた救いを獲得しなければなりません。そのためには、水と御霊によるバプテスマに与り、主について行くことが必要となります。これは、私たちがイエス・キリストを信じているということを人に伝える以外に、しなければならないことがあるということです。救いに近づくためにはどうすればよいかを人々に伝えなければならないのです。言い換えれば、教義を説かなければならない、ということです。これも親の責任であり、教会全体の責任でもあります。これも人に強制はできません。知らせて、納得させて、励ますのです。とはいえ、そのためには教義に精通している必要があります。

家庭訪問のような感じになるのをご容赦ください。家にいるような気分なので、いつもより自由にお話しさせていただきます。時々寂しく思うのです。というのは、新使徒教会の教義を、私たち新使徒教会員がきちんと理解していないからです。現状の理解度に満足している人が非常に多いのです。「教義ですかあ。そういえば昔、日曜学校や宗教教育でやったヤツですね。」堅信礼を受けた後、みんな忘れてしまうのです！

教義を忘れている教会は、弱い教会です。私たちは、自分がよく知っていることしか伝えることができないからです。愛する兄弟姉妹の皆さん、皆さんお一人お一人に、ぜひ訴えたい。私たち新使徒教会員は、新使徒教会の教義についてもう少し多くのことを知ってなければいけません。信仰十箇条である新使徒信条は知っておかなければいけません。これは、御存知のように、堅信礼を受ける前に勉強しておかねばならないもの、暗唱できるようにしておかねばならないものです。ところが堅信礼が終わった瞬間に忘れられてしまうのです。これではあまりにもひどい。新使徒信条には、非常に大切なことがいくつも書かれています。神学の学士号を取ってほしいとは思いません——そういうことを目指しているわけではないのです。しかし、

私たちの教会の教えについてもっと多くのことを知ることが絶対必要です。

まもなく——おそらく来年初頭までには——新しい教理要綱を反映した**信仰問答書**が出版されます。ここでその宣伝をしようというわけではありません。それは私の意図することではありません。ただお願いしたいのは、新使徒教会員ならば新使徒教会の教義についてももう少し多く知ってほしいということだけです。教義を内面化することによってはじめてそれを伝えることができるのです。教義についての知識を増やすだけでなく、その知識を確信することが必要です。私自身が——そしてほか使徒たちも同じですが——全面的に自信を持って申し上げられることは、こんにちにおける新使徒教会の教義はこんにちにおける救いのために主がお定めになったことを反映している、ということです。私たちが教義に納得していることを、私たちの子孫にわかってもらわなければいけません。つまり私たちが、過去についてじっくりと考えて、私たちの教会に起きていることとこんにちにおける教会の教義に関心を持つ必要がある、ということです。率直に申し上げますが、この教義に誇りを持つことができます。しかし教義を知ることによって、はじめて誇ることができます。教義を知りそれを納得することによって、はじめて人に知ってもらい、納得してもらうことができます。これがこんにちの救いに至る道であります。さらに励ましていかねばなりません。

人々を励ますということは、私たちが良い事柄つまり私たちの強さだけを語らなければならない、ということです。こんにちという教えは、新使徒教会に備わる強さの一つであります。過去にはこんなことに対処しなければならなかったとか過去にはこんなことは許されていなかったなどと文句ばかり言ったり、いつまでも過去を引きづって嘆くことで今の時代の人たちを困らせたりしたところで、いったい誰のためになると思いますか。

昨日私は教役者たちにこう申しあげました「もう自己憐憫はやめる時です。自分を気の毒に思い始めたら恐ろしいことになります。自己憐憫はやめましょう！

イエスの教えを人々に納得させることが我らの務め



一列目左からシュトゥッターダーク教区使徒、マイヤー使徒、イジュラン教区使徒、デュボワ使徒

そんなことをして、誰を励ますことができると思いますか。こんにちの教えが持つ素晴らしさについて語りましょう。」新使徒教会がこんにちにおいて教えていることを、私は誇らしく思います。愛する兄弟姉妹の皆さん、この教義には奥深さがあります！この教義を掘り下げれば掘り下げるほど、それだけ新しい発見があります。しかも掘り下げることによって、神の愛が私たちの思いをはるかに超越したすばらしいものであることを悟るようになります。ですから教会のこんにちにおける教えについて語り、こんにちにおける教えが持つ豊かさを発見しようではありませんか！そうすれば人々に信仰のきっかけを与えたり励ましたりすることができるでしょう。

救いの約束を伝えるためには、キリストを信じることとキリストの救いを伝えなくてはなりません。キリストの教えを伝え、教会の明日に備えることによって未来に備えなくてはなりません。なぜなら、先ほど申し上げたように、主は御自分の教会が最後まで存続することを望んでおられるからです。私たちがその一助となることを、主はお望みです。教会は生き続けなければなりませんし、生かし続けることが私たちの職務です。そのためには教会について語り、教会について人々に知ってもらわなければなりません。

家庭訪問のようにになっているならばどうかご容赦いただきたいのですが、私たち一人ひとりが教会についてどのように話しているかを自らに問いかけていただきたいと思います。まず、家庭でどのように話しているでしょうか。教役者について家庭でどのように話しているでしょうか。兄弟姉妹についてはどのように話しているでしょうか。家庭で教会の話をする場合、どんなことを話すでしょうか。教会について家庭内で交わされる話の内容は、子供たちが私たちから得られる

教会に関する情報となります。私たちが子供たちに伝える教会の姿となるのです。十代の少年少女が二十代の成人から得られる情報となるのです。子供たちや十代の少年少女が教会について話そうとする時、何を話すでしょうか。どんなことを話すでしょうか。この時に、私たちは聖なる責任を負っていることを自覚し始めるのではないのでしょうか。次世代の人たちが抱く新使徒教会に対するイメージは、こんにち新使徒教会について私たちが話す事柄や話し方において彼らに示されるイメージとなるのです。

話をさらに進めます。インターネット上で、私たちは教会についてどのようなイメージを与えているでしょうか。社会的なつながりを模索している人々にとって、私たちの教会はどのように映っているでしょうか。それは、私たちが教会についてどのような言い方をするかによって決定されます。私たちが新使徒教会員であることをどのように表現するかによって決定されます。なぜなら人々は私たちが新使徒教会員であることをわかっているからです。このことを考えるべきです！私たちの教会について人々に情報提供する場合は、**正しい**情報を伝えなければいけません。神の業が贖いの業であることを子供たちに納得させることが、私たちの務めです。子供たちや次世代の人たちに信仰を持ってほしいと思うならば、私たち自身が信頼できる人物とならなければいけません。私たちが教会で行動を起こせば信頼できる人物となるでしょう。教会の中で「これこそ神の業」「ここで神が働いておられる」「これこそ救い」と口で言っているだけでそれ以外は消費者のような立場で満足しているとすれば、だれからも信頼してもらえません。行動を通して神の業に従事するならば、そのために時間やお金や労力をつぎ込んでいる姿を見て、私たちが本気で信じていることを人々は納得するのです。こうして初めて私たちが信頼に足る人物となれるのです。教会で行動することによって人々に納得してもらいましょう。

そして最後に、将来において私たちの教会が確実に存続していくために努力しなければなりません。これは、今の世代に必須のものや優先させるべきものを、次世代のために犠牲にしなければならない、ということでもあります。次世代の人たちも確実に私たちの教会でくつろいだ気分を味わえるように、利己主義を控えて

犠牲を払う覚悟を持たなければいけません。このことが微妙な問題を孕んでいることはわかっております。

私たちは明日の教会を築こうとしています。ただしこれによって極めて直接的な影響を被こうむる場合があります。判断しなければならないこともあります。そこでこれまで行われたことについて考えます。教会員にとっての安心や利便性を考えれば、すべての村々に教会を造るべきです。それは良いことでしょう。しかしそうした場合、全教会員が教会から三キロメートル以内にいられるようにするために、教会の全財産を使い果たすこととなります。一方、三つの会衆を一つにまとめた場合——現在当該の教区使徒が取り組んでいる実例を挙げているわけですが——会衆にとって教会は少し遠くなりますが、少なくとも十年から五十年間は会衆を維持できる——しかも次世代において教会建築ができる可能性を残しながら——ことがわかっています。現在ある教会すべてを明日維持するだけの十分な資金はありません。これが現実です。

明日において教会を存続させるためにもう少し努力しなければならぬ現状を受け入れる必要があります。愛する兄弟姉妹の皆さん、これは会社の部署の士気を高めるために行っているスピーチではありません。これは専ら福音であります。私たちは神の子であり、聖霊という賜物をいただいています。ですから、救いの約束がほかの人たちではなく私たち一人ひとりのためにあることを悟る大いなる恵みを与えられているのです。しかし私たちには責任もあります。主は御自分の教会を最後まで存続させること、聖礼典を最後まで施すことを確約されました。しかしこのメッセージが伝わっていくかどうかは私たち次第です。このメッセージを子供たちに強制できませんし、同世代の人たちにも強制できません。しかし彼らに情報を知らせ、納得させ、動機づけを与え、励ますことはできます。私たちの教会のことを人々に話しましょう。今ある教会を生かし続けましょう。教会の明日に至る道を備えましょう。その際、何も突飛なことをやる必要はありません。主が願われていることをすればよいのです。

チチ・チセケディ教区使徒：

…教理要綱に、イエス・キリストは王、祭司、預言者の職務を担っている、と述べています。旧約の預言



チセケディ教区使徒



バンスバツハ使徒

者は、神の御旨を宣べ伝える職務を、召命として与えられていました。イエス・キリストも同様に預言者として活動しておられます(教理要綱 3.4.7.3)。具体的にイエス・キリストは何をなさるのでしょくか。神の御旨を宣教されます。過去を照らし出し、隠れた事柄を明らかにされます。永遠の生命に至る道をお示しになります。そして未来に関する約束を交わされます。この役割を家庭で実行するのは親の責任である、と主使徒は——かなり強調して——言われました。このことについて私も逆の立場で考えたいと思います。つまり子供の立場です。子供は「お父さん、お母さん、主使徒が言ったことを聞きましたね。ですからお願いします」と言うでしょう。そうです。愛する主使徒、私たちはそれを実行します…。

レイモン・エストラード使徒：

…今お話しがあつた主の預言について、ヨハネの黙示録の中に次のような一節があります「見よ、わたしはすぐに来る。わたしは、報いを携えて来て、それぞれの行いに応じて報いる」(黙示録 22:12)。私たちは、この地上にどのような「行い」を残していこうと思つてしょうか。この世的なこと、物質的なことは時間が経過すれば消滅して残りません。しかし、主による行いを創り出せば、その行いは永遠に残ります。信仰による行い、教会や主イエスのために注ぎ込まれる熱意の行いは最後まで残ります。教役者であろうと教会員であろうと、皆主の僕です。私たち皆が神の御手において用いられる道具になりましょう…。

御存知のように、どんなに優れた画家でも、自分の資質や技能を表現するのに、非常に小さな道具を使わ

なければなりません。画筆であります。画筆という小さな道具がなければ作品を創出することはできません。私たちは作品や絵画を見ている時、使われた道具について語ることはありません。作品を生み出した画家なり作者なりの話をするわけです。同じことが私たち一人ひとりについても言えます。使徒も然り、教役者も然り、兄弟姉妹も然りです。イエス・キリストの御業というこのすぐれた作品を生み出す一助として神の御手の中で使われる小さな画筆のようなものであっても、御手によって使われる道具になりましょう…。

ヘルベルト・バンスバッハ使徒：

…聖書によれば、イエスの母マリアも弟子の一人でした。皆が聖霊の来臨を待ち望んでいた状況を想像して下さい。しかし一日目はおいでになりませんでした。彼らは夜も寝ずに待っていましたが、何も起こりませんでした。二日目も、三日目も何も起こりませんでした。間もなく待ちくたびれた初代の弟子たちはこんな疑問を抱き始めました「自分たちは主の約束を正しく理解しているだろうか。もっと長く待つべきか、それとも待つのをやめるべきか。」私は、イエスの母であったマリアが弟子たちを励まし続けたのではないかと想像します。こう言ったに違いありません「主が言われたように、疑いを持たず、信仰に忠実で、一緒にいてちょうだい。主が約束して下さいましたのですから！」私たちもこれと同じ状況ではないかと思えます。マリアと私たちを比べてみて下さい。教会は私たちの子供たちを組み入れます。そして、当時のマリアと同じように、子供たちや青年たちを力づけ、彼らに「こここそが他に無い絶対の真理です。信仰に忠実でいるように！」と忠告することが私たちの職務です。スイスにペスタロッチという偉大な教育者がおります。彼は、最高の教師とはロールモデルすなわち行動の規範となる存在である、と言っています。私たちの属す会衆が一つに結ばれているならば、子供たちにとってその会衆はロールモデルであり、教会の将来にとって規範となる存在です。このようにして子供たちを力づけ、子供たちを励まし、その一方で私たちは主イエス再臨の約束が実現

するのを待ち望むのです。

シュナイダー主使徒：

愛する兄弟姉妹の皆さん、けさも主から恵みをいただこうとしています。この恵みが大切に貴重であるということをもいつも自覚しているでしょうか。

しばらく前に私はサウル王の記事を改めて読み返しました。この聖書の記事を読むたびに、私は衝撃を感じます。サウルには自分自身の考えがあって、自分が正しいと思ったことを実行したのです。このような姿勢は、神の視点に立てば、重大な罪でした。神はサウルのところに預言者をお遣わしになりました。そして預言者はサウルにこう告げました「お前は罪を犯したから、神はお前を退けられる！」哀れなサウルは赦しを乞うて言いました「私は大変な罪を犯してしまいました。どうか赦して下さい！」これに対して神はこう仰せになりました「だめだ。あなたは完全に退けられる。もう復帰することはない」(サムエル記上 15:24-26)。その後サウルは何年も生き続けましたが、神から拒絶されたままでした。恐ろしいことです！サウルと同じことを神が私たちにも仰せになることは、可能性としてありますが、実際には仰せになりません。私たちは神に詣でて、次のように申し上げればよいのです「本当に重大な罪を犯しました。自分が正しいと思ったことしかせず、自分のやりたいことをやり、神様が願っておられることをやりませんでした。どうか赦して下さい！」そうすれば神は、何の疑義も挟むことなく、私たちを赦して下さいます。私たちとサウルとはなんと大きな違いでしょうか。こうして比べてみると、恵みというものの価値の高さがわかります。

愛する兄弟姉妹の皆さん、けさの聖餐は何よりも感謝の食事として行いましょう。約束を私たち一人ひとりに、さらに私たちの子どもたちに与えて下さったことについて、永遠なる神に感謝を捧げましょう。私は今、非常に慎重な姿勢でこのことを申し上げております。お子さんが教会に通わなくなって苦慮されている親御さんがたくさんいらっしゃることを、私は存じております。「この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、与え

こんにちの教えが持つ豊かさを発見しなさい



引退するエストラード使徒(左)とその労をねぎらうシュナイダー主使徒



新しく任命されたジャンー・ライブフリート使徒(右)

られている」ことを忘れないで下さい!このことは変わりません。救いの約束は皆さんの子どもたちにも有効なのです。もちろん、皆さんのお子さんも物事を自由に決められます。私たちは、知らせて、納得させて、励ますことしかできません。しかしこのことを私たち皆でやていきましょう。子どもたちに教義を説いても役に立ちません。逆に私たちが子どもたちの魂にできる最善の奉仕があります。それは、誠意を持って日常生活の中で福音を適用させ、神の御旨に適った日常生活を送ることです。これが、教会に通わなくなっている子どもたち、礼拝に出席しなくなっている子どもたちに出来る最善の奉仕であります。これは最終的に効果を上げることとなります。つまり「大人たちが本当に有言実行している、主イエスの教えを本当に実行している」ことを、子どもたちは知るので。これは神から伝授された対処法です。愛する兄弟姉妹の皆さん、どうか知っておいて下

さい。救いの約束は今でもあなたがたのお子さんに与えられています。どうか、皆さんの生き方が福音や使徒の教えに適うように、以前よりもいっそうの努力をして下さい!時が来れば、神が皆さんの子どもをお忘れになっていないことを証明して下さいます。

さらにけさの聖餐を、一種のワーキングランチ<＝仕事の話をしながる取る昼食>のように行いましょう。救いを次世代に伝えることは、老若男女の別なく、すべての人の責任であることは、私たち全員がよくわかっています。イエスや、教義や、教会に関することを人々に伝え、人々にそれを納得させ、人々を励ましましょう。将来についてのこの約束を伝えていくことは、例外なく私たち全員の責務であります。教会全体が「話はわかった。さっそく取りかかろう。怠けや誘惑に屈してはいけな。がんばろう。あとは主がやって下さる」という気持ちを持った一つのチームのようになって、けさの聖餐にあずかってもらうことが、私の切なる願いです。

使徒言行録 2 章 39 節

「この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」

新使徒教会員一人ひとりには以下のような責任があります；

- 言動を通して神の御旨を宣べ伝えること
- 神がして下さったことを、感謝と賛美を示すことによって知らせること
- 救いの約束を次世代に伝えること

チャンスをつかむ

子どもの時の写真アルバムを見て思い出すことがありますか。私はほとんど何も思い出せませんが、アルバムにある一枚の写真だけは、今でもはっきりと思い起こさせることがあります。それは、ロバに引かれた馬車に乗っている二人の太った男であります。この二人の男は釣り竿を使って——馬車の上でくつろぎながら——そのロバの鼻先に大きなにんじんをぶら下げていました。かわいそうなロバはひどく腹を空かせていたようで、そのにんじんを食べようと必死に走っていました——もちろん、必死に走ってもにんじんを口にはできません。馬車の男はそのロバの愚かさに大笑いしていました。この二人の男たちからずるいやり方からかわれているのを、ロバは見抜くことができないのです。当時私はぞっとしました。神様がお造りになったものをそんな方法で欺くなんて！このロバは決してにんじんを食べることができないのです。すぐ目の前にあるのに。

年月が経って、気がついてみると、私はしばしば自分自身がこのロバのようになっていました。そして誰かが私の鼻先に、にんじんのような何かその気にさせるものをぶら下げていました。その誰かは大もうけしているにもかかわらず、私は何も手に入れることができないのです。このことは私に教訓となりました。この時以来、興味深いものを鼻先に吊るしながら誘惑しようとする人に対してはもっと用心するようになりました。

神は嘘をつかない、ということを詠^{うた}った讚美歌があります。神様からチャンスをいただいたことのある人なら、だれでもそのチャンスをつかみ取るための助けや能力もいっしょにいただいています。このことを使徒パウロもわかっていました。パウロはいつも自分と

一緒に活動していたテモテにこう言っています「永遠の命を手に入れなさい。命を得るために、あなたは神から召されたのです。」神はテモテに永遠の命を獲得するチャンスをお与えになりました。しかしこのチャンスを、ビーチチェアにくつろいだまま、暖炉のある部屋で寝ころんだまま、つかみ取ることはほぼ不可能です。パウロは「信仰の戦いを立派に戦い抜きなさい」と言っています。

パウロがテモテに言っていることは、あの写真アルバムにあった、ロバの鼻先に吊るしてあったにんじんの話と、一見すると同じに思えます。どちらも目の前には、魅力的な目標があります。すなわち、永遠の命です。しかし苦勞なくして利益はありません！苦勞して、体を動かし、戦わなければなりません。しかも実際に目標に到達した時の状況ははっきりしておりません。しかしパウロはここで強い確信を持っています。イエス・キリストが祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主であることを事実として自覚していたのです。時が来ればおいでになることを自覚していたのです。ですからこの時に備え、戒めを守り、信仰の戦いの立派に戦い抜きなさい、というパウロの論議は、テモテだけに言ったことでないことは確かです！

神は私たちに永遠の命に与るチャンスを与えて下さいました。これに対して『永遠の命は非常に大切なものだから神の戒めを守り、自らを改善するよう努め、信仰の戦いを立派に戦い抜いて行かねばならない』という判断をするかどうかは、一人ひとりが決めることです。永遠の命という目標の他に、もう一つ別の目標ができたとします。この時、主を熱く愛し全面的に信頼しているから、永遠の命を優先しようという覚悟はあるでしょうか。この問いに対して、いろいろと奮闘しながらも、いつも明確に『はい』と答えられるならば、このチャンスをつかみ取れていることになります。

キリストについて行くかどうかを、人生の一度だけ決めればよいのであれば、こんな楽なことはないでしょう。パウロはフィリピの信徒に宛てた書簡の中で、主について行こうとする彼の変わらぬ決意について、



次のように書いています「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、…何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。」ですから過去を忘れて、未来のこと、

すなわち目標のために努力することが不可欠のようです。私たちに与えられているチャンスをつかみ取りましょう。神は私たちを救って下さいます——ロバをかからうようなことを私たちになさいません！

(英語版 Our World --- FROM THE BIBLE 8月号より)

ペトロ、牢獄から解放される

(使徒言行録 12章 1-17節)

イエスが昇天された後弟子たちは、イエスが全人類のために死なれ復活されたという良い知らせを宣べ伝えていきました。しかしこれを聞いてすべての人が気分を良くしたわけではありませんでした。

当時、この地域を治めていた国王ヘロデ・アグリッパはキリスト教徒を迫害し始めました。ペトロも逮捕・投獄されていました。

教会では人々が集まって、ペトロのために熱心に祈りが捧げられました。その日の夜、ペトロは二人の番兵の間で眠っていました。彼は鎖でつながれていました。戸口にも番兵が立っていました。すると突然天使がその場に立って、独房は光で明るくなりました。

天使はペトロの肩を軽くたたいて彼を起し「急いで起き上がりなさい」と言いました。すると鎖が彼の手から外れました。

天使は言いました「帯を締め、履物を履きなさい。」ペトロはその通りにしました。次に天使は「上着を着て、ついて来なさい。」ペトロは天使について行きました。

天使とペトロは一つ目の番兵所の前を通り過ぎ、続いて二つ目を通り過ぎ、ついに町に通じる鉄の門にやって来ました。門は彼らのために開いていました。その門をくぐり、通りに出ました。通りを歩いて、しばらくすると、天使はペトロのもとから去って行きました。

この時になってようやくペトロは、自分に起きてい

ることが夢でないことに気づきました。彼はマルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に向かいました。そこではたくさんの人たちが集まって祈りを捧げていました。

ペトロがドアをノックすると、ロデという女中が取り次ぎました。ロデはペトロの声だと分かったと、喜びのあまりドアを開けずにペトロが外にいることをみんなに知らせました。みんなはそれが信じられませんでした。

ペトロはノックし続けました。ようやくドアが開いて、人々はペトロの姿を見て驚きました。ペトロは手で制して彼らを静かにさせ、主が自分を牢から出して下さった次第を説明しました。そしてこの奇跡を人々に伝えなさい、と言ってからその家を出ました。

シモン・ペトロ。ガリラヤ湖畔ベトサイダに生まれる。弟のアンデレ同様、漁師であった彼は、イエスに請われて弟子となる。ペトロは、ヨハネやヤコブと共に、使徒たちの代表者として活動し、イエスの友人として信頼されていた。イエスの死後、使徒の指導者及びエルサレム教会の指導者となる。紀元64年頃、ローマにおけるキリスト教徒迫害の中で殉教したとされている。

(英語版 Our Family 9月号 FROM THE BIBLE より)

モーセがファラオの前で初めて奇跡を起こす

(出エジプト記 7章 1-13節)

主なる神は燃える柴の中でモーセに現れました。神はモーセに、イスラエルの人々を奴隷から解放してエジプトから出させ御自身がお示しになる地に導く、と仰せになりました。

神はモーセに言われました「あなたは兄のアロンに、私が述べるすべてのことを告げ、アロンはそれをファラオに告げ、イスラエルの人々をエジプトから脱出させなければならぬ。」

「しかし私はファラオの心をかたくなにするから、あなたの言うことを聞かないだろう。そこで私は多くのしるしを示し、多くの奇跡を起こす。」

「私はエジプト人に疫病を蔓延させ、イスラエルの

人々をエジプトから脱出させる。エジプト人は、私が自分の民を解放させる主なる神であることを知るであろう。」

モーセとアロンは神から命じられたことを行いました。モーセとアロンがファラオと会談したのは、モーセが八十歳でアロンが八十三歳でした。神はモーセに言われました「ファラオがあなたがたに奇跡を行うように言ったら、アロンにこう言いなさい『持っている杖をファラオの前に投げなさい。するとその杖はへびになる。』」

そこでモーセとアロンはファラオの所へ行って、神から言われた通りのことを実行しました。アロンが杖をファラオの前に投げると、その杖はへびに変わりました。するとファラオはすぐに賢者や呪術師を召し出

しました。

エジプト人呪術師も自分の杖を投げてへびにしましたが、そのへびはすべてアロンのへびに食べられてしまいました。

それでもファラオはかたくなで、モーセとアロンの言うことに耳を傾けず、イスラエルの人々の解放も拒否しました。そこで神はエジプト人に疫病をもたらされました。

ファラオはエジプトの中で最も強大な権力を持ち、非常に重要な存在でした。人々から神と見なされていて、社会の最上位に君臨しました。法律を制定し、宝物を管理し、軍隊に対して戦争も指揮しました。

(英語版 Our Family 8月号 EXPERIENCED より)

主よ、ありがとうございます！

最近私たちは祈りの力を体験しました。「悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたはわたしをあがめるであろう」と神は詩編の中で述べておられます。苦難というのは主観的なものです。同じことに対して、苦難に感じる人もいれば、全くそう感じない人もいます。しかし、一つだけ確実なことがあります。それは、神様は、私たちの感じるあらゆる悩みを理解され、私たちの捧げる祈りを聞いて下さる、ということです。このような素晴らしい神様を称えましょう。

娘のダイアナが自動車教習所に通い始めたのはつい最近のことでした。順調にこなし、学科試験も難なく合格しました。彼女が17歳の誕生日を迎える直前に、指導教官は実地試験の受験手続きを進めました。私は「大丈夫かなあ」と思いました。試験の時に頭脳明晰であるためにも、また渋滞の中で車をうまく操れるようになるためにも、まだまだ練習が必要ではないか、というのが私の本音でした。それでも彼女の指導教官は彼女が順調であることに自信を持っていました。

初めのほうの教習はとてもうまくいっていて、ダイアナはほとんど有頂天でした。実技試験も、何の問題もなく合格できるだろう、と自信を持っていました。ところが試験の日が近くなって教官が難度を上げるにつれて、ダイアナは神経質になって、うまくいかなくなってきました。

実技試験前夜、彼女はとても神経質になっていました。もっと実地練習を重ねた方が彼女のためではないか、という私の考えが裏付けられた形です。

私たちは神に祈って、ダイアナが集中できるように彼女の緊張を和らげて下さるようお願いしました。そして私たちは家族みんなにダイアナの実技試験のことを話し、みんなでダイアナのために祈りました。

実技試験の日がやって来ました。すると一つ目の祈りが叶えられました。ダイアナは夕べぐっすり寝られてすっかり落ち着いた、ということです。

本試験前に、もう一度教官と一緒にコースを回って試験に備える機会が与えられました。その時はあまりよくありませんでした。「試験の時にこんな運転だったら、試験に受からないよ!」と教官から言われてしまいました。

指定された時間に試験官がやって来ました。すると試験官が車に乗り込んだ瞬間から、ダイアナは落ち着きを取り戻し、指定された走行と課題に集中することができました。三十分後、ダイアナが車を車庫に入れると、試験官は合格証書を彼女に手渡しました。

神に喜んでいただくために自分は何をしなければならないか



エストラード使徒。担当する南太平洋上の島嶼部にて

「わたしをお遣わしになった方は、わたしと共にいてくださる。わたしをひとりにしてはおかれぬ。わたしは、いつもこの方の御心に適うことを行うからである」(ヨハネ8:29)。これは、イエスが御自身と天の父について言われたことであります。

イエスはいつも、天の父に喜ばれることを実行されました。「神に喜んでいただくために自分は何をしなければならないか。」この問いは、私にとって常に人生の指針となってきました。そしてこの問いに答える努力をしてきました。私たちは以下の方法によって、神に喜んでいただきます：

- 福音を信じてイエスの教えを実践することでイエスについて行くこと
- 主の日を聖として守り、主の御言葉への関心を高めること
- 主の戒めを守ること。このことについて、士師の洞窟に入れられたダニエルのお話を取り上げたいと思います。国王ダレイオスによる法律——国王以外の人や神に祈ることを禁止する法律——の適用

期間は三十日間だけで、国王の信じる神を否定することは要求していませんでした。ダニエルはこの法律に従わなかったため、獅子の洞窟に投げ込まれましたが、そこで彼は不思議な方法で神の執り成しを体験することができました。こんにち悪魔が言っているのは、神は存在しない、ということではありません。一時的に教会から離れても、一時的に祈るのをやめても、一時的に犠牲を捧げなくても何ら影響はない、ということを受容させようとしているだけです。しかし私たちは主の日を、毎日待ち望んでいるわけです。一刻の猶予もあり得ないのです。

- イエスを信頼すること。困難に遭遇すると、足元をすくわれるような恐怖を感じることがあります。そのような時イエスはこう語りかけて下さいます「恐れてはならない。ただ信じなさい。私を信頼しなさい！」そして「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ28:20)という約束を体験させて下さいます。
- 御業の完成を補佐すること。隣人に理解を示し、兄弟のように親しく交わる生き方をしましょう。
- 神を畏れること。エレミヤ書9章24(新共同訳23)節に次のように書かれています「むしろ、誇る者は、この事を誇るがよい／目覚めてわたしを知ることを。わたしこそ主。この地に慈しみと正義と恵みの業を行う事／その事をわたしは喜ぶ、と主は言われる。」

以上が、皆さんに残していくメッセージです。これまで皆さんが長年にわたって何度となく支えて下さったことに感謝を申し上げます。

レイモン・エストラード

レイモン・エストラード。1948年12月10日生まれ。1997年12月1日、使徒に任命。フランス、コンゴ民主共和国及び南太平洋上のフランス語圏を担当。

新使徒教会 教理要綱(抜粋)(6)

6 イエス・キリストの教会

イエス・キリストの教会は、主御自身が地上に設立されたものである。教会において、人は救いに近づくことができる。教会で、人は神を崇め、称えるのである。

6.1 「教会」という用語について

「教会」(ドイツ語「キルヒェ kirche」、英語「チャーチ church」)という用語は、ギリシア語の「キュリアケー κυριακή」(「主に属す者たち」)に由来している。新約聖書では「エクレシア εκκλησία」(「主に召し出された者たち」)という語を用いている。「エクレシア」という語は「集まり」「会衆」「教会」と訳すことができる。

一般的に言う英語の「チャーチ」には様々な意味がある。信徒が集まる場所としての、キリスト教の神の家という意味もあれば、キリスト教を信じる人々の集まりである会衆という意味もある。他にもキリスト教の教派を表す場合もある。ただ、ここでいう「教会」とは、信仰の対象を指すものとする。

キリスト教会に属している人は、神と永遠に親しく交わりをするために父、御子、御霊なる神から召された者たちである。教会生活の中心は礼拝である。教会の真ん中には、イエス・キリストがおられ、差し迫る御自身の再臨と「天の婚姻」のために、使徒を介して花嫁の会衆を備えておられる。

6.2 聖書に基づく教会の設立

イエス・キリストが教会を設立された目的は、一つは、人類に救いをもたらす、三位一体の神と永遠に親しく交わるようにすることである。もう一つは、神を崇め、称えるためである。

6.3 イエス・キリストの教会——神秘

教会の土台となっているのは専らイエスの御言葉、御業、御性質であり、このことは現在においても未来においても同じである。イエス・キリストは真の神であり真の人である。つまりイエス・キリストは二つの性質を帯びている(3.4.3 参照)。この神秘は解明されないままである。同じようにキリストの教会についてもその性質を解明することはできない。やはり神秘である。キリストの教会にも二つの性質が備わっている。

こうしたことは、信仰によってはじめて理解することができる。

神と人類との仲介者であられるイエス・キリストによって、人類は救いを得ることができる。この良きおとずれを宣べ伝えるのは、使徒である(一テモ 2:5-7)。キリストの御言葉は聖霊の働きによって説教の中で様々な方法で表現される。この御言葉を聞くことによって信仰は始まる(ロマ 10:16-17)。教会はその能力において福音宣教によるキリストの仲介の職務を行う。

キリストの教会はその性質において、イエス・キリストの持つ二つの性質を反映している。キリストにある、神としての性質は秘められており目で見ることができないが、人としての性質は目で見ることができ、具象化されている。人としての性質においてイエスは他の人々と同様に齢を重ねた。痛みも恐れも感じ、飢えも渇きも覚えられた。それゆえに、キリストは全人類と運命を共にしたのである。ただし例外として、キリストは罪に隷属することが無かった。

同様にキリストの教会にも秘められた面——目に見えない面——がある。キリストの教会が持つこの二つの面は、イエス・キリストの持つ二つの性質と同じように、不可分である。両者は異なるものでありながら、分離し得ないものである。

イエス・キリストの持つ神としての性質と同じように、教会の持つ隠れた側面について説明することは、極論すれば不可能である。ただし教会に隠れた側面が存在することは、聖礼典サクラメントがもたらす効果や神の御言葉において実感することができる。適切な洗礼を受け、純粋に信じ、主を告白する者たちで構成される教会の、隠れた側面には、四つの大きな特徴(唯一、聖なる、公同、使徒的)が完璧な形で存在する。このような教会の側面については、新使徒信条第三条に明記されている。

キリストの教会が持つ見える側面については、人としてのイエス同様に、人類の歴史にも刻まれている。イエスと異なり、教会の中で人が行うことは罪に隷属している。それゆえ人が持つ間違い、逸脱、過失は教会にもある。しかし教会が持つそうした不完全な見える部分は、真の信徒たちや選ばれた者たち(4.5 参照)

が属す目に見えない完全な教会に、損害を与えたり破壊したりすることはできない。

このように教会に見える部分と見えない部分があって、それらが相互に関係し合い且つ同時に存在することを理解することを可能にするのは、ひとえに信仰である。見える形の教会——歴史として具体化されているキリストの教会——は信仰の対象ではなく、現在において救いと神の近さを体験できる機関なのである。

6.4 唯一の、聖なる、公同の、使徒的な教会を信じる

救いに近づくことができるのは、イエス・キリスト教会においてである。教会は主御自身が地上で設立されたものである。教会に属す人たちは、父、御子、御霊なる神と永遠に親しく交わるとする召しに与っている。教会では神を崇める。教会生活の中心は礼拝である。

キリスト教会における霊的性質や完全性は、秘められた状態にあり、これを理解するためには信仰によるしかない。しかしこれは、歴史的に明らかのように、認識・体験できるものである。新使徒信条第三条で「私は、聖霊と、唯一で聖なる公同の使徒的教会 [...] を信じます」と告白するように、教会が信仰の対象なのである。

新使徒信条における最初の三箇条では、父、御子、御霊なる神への信仰を告白する。同様にキリスト教徒も時代を通じて教会への信仰を告白してきた。このことから明らかなのは、教会が外見だけあるいは平凡な存在ではなく、キリスト教信仰に基本要素の一つである、ということである。教会がなければキリスト教徒は存在し得ないのである。

6.5 イエス・キリストの教会と宗教団体としての教会

イエス・キリストの教会が、唯一、神聖、公同、使徒的であれという戒めに対して、それを完全に実現できずにいることは、歴史の示すところである。その主な理由としては、使徒宣教職の全く活動しなかった時期が長く、19世紀から復興した使徒宣教職がまだ限られた効果しか上げられていないことである。「キリスト教の教会」は、文化的、社会的、歴史的相違もさることながら、同じ一つの福音、同じ一つの聖書を巡って、人間の行う解釈に実に様々な違いがあることによって、多くの教派が存在している。こうした相違があっても、キリスト教会は謎の存在ではなく、近寄りづらい存在

でもない。キリスト教会であることが最も明確にわかるのは、使徒職がおり、生きている者にも故人にも三つの聖礼典サクラメントが執り行われていて、御言葉の宣教が適切に行われていることである。主による贖いの御業1が構築されているのは、このキリスト教会である。キリスト教会では、天の婚宴に備えて、キリストの花嫁の準備が行われている。

キリスト教の教会2である要件は、聖書の証しする通り、洗礼、イエス・キリストに関する一般的告白、それにイエス・キリストが唯一の主であり贖い主であることを信じることである。キリスト教で伝統的に言われていることによれば、バプテスマを受けてもイエスを信じずイエスが主であることも告白しない人たちと違い、真の信徒だけが見えない秘められた教会に近づくことができる(黙3:1)。

そもそも教会——信仰、希望、愛を共にする場としての教会——を体験できるのは、バプテスマを受け、信仰に適った生き方をし、イエスが主であることを公に言い広めている人たちだけである。それゆえキリスト教会では、花嫁の準備のために使徒職が活動している、つまり主による贖いの御業が行われているだけではない。隣人を積極的に愛し、イエス・キリストをはっきりと告白し、キリストについて行こうと真剣に努力しているのは、他宗派の教会でも行われていることである。礼拝の中で三位一体の神を崇め称えている他宗派の教会もあるし、形式や程度は様々でも、唯一、神聖、行動、使徒的という点は、他宗派にも見られる。

こんにち遣わされている新使徒教会の使徒たちが、主の再臨に備えてキリストの花嫁を整えている所では、不完全ながらも、必要なあらゆる手段を行使することができる。主による贖いの御業は、イエス・キリストの教会で完成されるのである。



10月 礼拝案内(多摩教会)

日	曜日	開始時刻	礼拝・行事の詳細
2	木	19:00	週中礼拝
5	日	10:30	収穫感謝祭礼拝 【礼拝後親睦会あり】
9	木	19:00	週中礼拝
12	日	10:30	日曜礼拝 【教会清掃日】清掃後に聖歌隊練習を行います。
16	木	19:00	週中礼拝
19	日	10:30	日曜礼拝 【お茶会】説教内容についてのQ&Aや信仰における疑問など お茶会終了後に聖歌隊練習を行います。
23	木	19:00	週中礼拝
26	日	10:30	故人のための準備礼拝 礼拝後に聖歌隊練習を行います。
30	木	19:00	週中礼拝

※10月のお茶会は19日に行います。第四日曜日の26日ではありませんのでご注意ください。

<<編集後記>>既に秋分の日を送り、10月5日に教会では収穫感謝祭を祝います。公平で恵み深い神様は、義人にも悪人にも等しく、雨を降らせ太陽を登らせてくださいます。その結果田畑や野山から収穫された果実類、穀類や野菜類をもって、教会の祭壇を飾り、万物の創造者なる神に感謝を捧げます。食前に、「いただきます」と、神様に謝意を表してから食べ始めます。愛読者のみなさん、お変わりは御座いませんか。日々感謝して



いくなら、心身の健康も伴います…これは確かでございます。当教会では“愛の実行”を目標にして進んでまいりたいと思います。目下世界中が多様な面で混乱状態ですが、私たちは救い主イエスに向かって成長し、間もなく再臨されるイエスと共に歩むならば、日々勝利です。今回の主使徒のメッセージから将来にどのように備えるべきかを、学び取ることができますね。皆様の御家庭に、職場に、学びの場に、また世界中に、神の平和と祝福とがありますように！マラン・ナタ！！